

令和元年5月9日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02076

研究課題名(和文) ソクラテス以前哲学におけるいわゆる無神論の実相の解明とその史的展開の再検討

研究課題名(英文) A re-examination of the nature of the atheism and its historical development in the presocratics

研究代表者

三浦 要 (MIURA, Kaname)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：20222317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ソクラテス以前の哲学者が、脱神話化や脱神論化によって、神(々)を人格者から抽象的原理へと還元していると言明することはできない。彼らの自然学説の抽象的原理は依然として人格的要素を内包した能動的作用者であり、この還元は未だ達成されてはいない。自然哲学者における神(々)は、実は超自然的なものでも非自然的なものでもなく、むしろ自然内的なものである。その神(々)は、自然の内側から世界を規制する法則・自律的原理として構想される。たしかにそれは神人同形性という特質をもたないものではあるが、不死性と偉大なる権能を所有しているものとして、依然として宗教感情の向かう対象となりうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

要素的物質を「始源」とし神話的自然観に基づく神人同形論を否定するソクラテス以前哲学者の自然学説。それは自然の理性的探究から得られた世界についての彼らの新しい見解である。は、一般に、神話的・国家宗教的神論と根本的に異なる革新的神論(つまり自然神論)につながっていった、とみるのがオーソドックスな解釈だが、これに異を唱え、この解釈が彼らの異端的無神論の本質を捉えそこなったものであり、合理性と神秘性はさまにおいて成立しているソクラテス以前哲学者の自然哲学とその宗教的心性を明らかとする試みである。

研究成果の概要(英文)：It is often said that the presocratic philosophers reduced gods from personal beings to abstract principles through demythologization, which is not the case. Their natural principles still acted as a purposive and personal agency in the cosmological processes and such reduction had not been realized yet. As such, they are not super-natural nor non-natural but rather "intra-natural" deities ruling autonomously the world processes from inside the world. The divine intra-natural principles, not having a divine property of anthropomorphism any longer, retain the immortality and power which deserve religious faith and feeling.

研究分野：哲学

キーワード：ソクラテス以前哲学 無神論

1. 研究開始当初の背景

(1) 古典期のギリシアにおいては、広義の無神論——いかなる神の存在も否定する厳密な意味での無神論だけでなく、国家宗教における神を否定し別の神格を信奉する異端思想やこれらと親近性を有する宗教的懐疑主義・不可知論も含んだ無神論——が不敬神として非難・訴追の対象となったが、その背景には、要素的物質を「始源」（それ自体が神的存在）とし、神話的自然観に基づく神人同形論を否定するソクラテス以前の自然哲学の成立があったと指摘される。その場合、彼らの神論は“natural theology”と呼ばれ、自然の理性的探究から得られた世界についての彼らの新しい見解は、神話的・国家宗教的神論と根本的に異なる革新的神論（つまり自然神論）につながっていったとされる。この解釈はオーソドックスなものとなっている。

(2) しかし、ソクラテス以前哲学者の「合理性」なるものを過度に強調すると、彼らの異端的無神論の本質を見誤ることになる。言うまでもなく彼らは自然の原理を語るときに伝統的宗教を完全に否定したわけではなく、またその「異端的な神」も必ずしも自然と合一のものと思念され自然化されているわけではない。合理性を過度に強調することもなく、しかしこれを過小に評価して彼らの神概念を完全に神秘化することもなく、その独特の宗教性に光を当てて彼らの神観を改めて評価し、またその展開を前4-3世紀のエウヘメロスまで視野に入れて連続性の下で考察しようとする研究は、国内外においてまだ少ないのが現況である。

2. 研究の目的

古代ギリシア哲学におけるいわゆる無神論に関して、特に前6世紀以降のソクラテス以前哲学者を中心に前4-3世紀のエウヘメロスまでを射程に入れ、未だ検討不十分なその実相を原典に基づいて解明し史的展開のあり方を連続一体的に再検討すること、これが本研究の目的である。従来の研究では、初期のギリシア哲学における無神論とその史的展開が議論されることはまれであり、論じられるにしても、古代原子論をその最終形とする「物活論的無神論」として一括されることが多い。しかし、彼らの無神論を等しく「神の自然化」と捉える理解はきわめて皮相的である。本研究は、初期ギリシア哲学者の無神論の実相と影響関係を再検討することで、ステレオタイプと化した従来の安易な無神論解釈に代わる見解の提示を目指すものである。

3. 研究の方法

研究方法は文献研究が基本で、各哲学者の著作原典及び二次資料を研究書・研究論文も参照しつつ精確に読解し、それを踏まえ彼らの無神論の実相と影響関係を明らかにする。具体的にはまず、ソクラテス以前哲学者の異端的無神論の特質を、彼らの原典に基づき確認する。特に、彼らにおいて「自然＝神」という等式が等しく成立するというオーソドックスな主張の妥当性を検討し、その「神的存在」が必ずしも完全に自然化されるわけではなく、むしろ自然内的な存在である可能性を明確にする。また、ソクラテス以前の自然哲学の異端的無神論が、伝統的宗教の神人同形論を克服したところに成立したものであるとするなら、彼らの自然学説において伝統的神々が登場することをどのように説明するのか、そもそも前者は後者と明確な対立関係にあるのか、という点を検討する。合わせて、宗教的な懐疑主義ないし不可知論を唱えたという点で自然哲学者とは区別されるソフィストたちの懐疑主義ないし不可知論の特質と、自然哲学的神論との関係を、後のエウヘメロスの無神論への影響も含めて考察する。

4. 研究成果

(1) ひとつは不可思議な自然現象や統御困難な諸力の経験を通じて、世界のなかにあらゆる意味で人間を凌駕した超越的で神秘的な諸存在を見てとる。それは有限の人間性と対比される超越的神性という特性の抽出と言ってもよい。ひとつは、このいわば「超自然的」と見える存在に対して賞賛や尊崇、そして憧憬や畏怖といった宗教感情を抱き、自らの生と密接に結びついたものとしてこれに祈りや誓願を捧げて働きかけようとする。そのような神的な諸存在に思考や意志、感情といった人格的要素が認められて具体的形姿が与えられると神話的世界が成立する。自然物、自然的現象、そして自然的諸力の発現は、神的存在そのものやそれらの振る舞いとして描写され、その歴史が神統記や宇宙生誕論として物語られる。神話と切り離すことのできない古代ギリシアの宗教においても、何よりもまず詳説されるのは神々が体現する自然的世界そのもののあり方やその諸様相にほかならない。

(2) ところで、一般に紀元前6世紀初頭とされる哲学の成立という事態に目を向けたとき、このような古代ギリシアの神話的思考形式や宗教は哲学や合理的思惟とどのような関わりをめているのだろうか。この点についてはこれまで、両者が一定の緊張関係にあるとみる見解と、むしろ両者は親和的關係にあるとみる見解の、相反する見解が示されてきた。例えば Vernant は、哲学は神話や宗教の超克あるいはそこからの解放の結果であり、本当の意味での連続性はそこには存在しないと考えた。また、Rovelli の見立てによれば、ミレトス派の宇宙形成論が叙事詩人たちのそれと異なるのは神々の消失という点であり、タレスやアナクシマン드로スによる宇宙世界の説明における革新的な理論は、完全に自然的なことばづかいによって定式化されており、神的なものへのあらゆる参照を明確にかつ根本的に排除しており、これが彼らより後の、神的存在を顧慮することのない知識探究への道を拓いたのである。このような「合理的」な理解は、いわゆる「ミュートスからロゴスへ」という単純明快な図式に対する疑義の

もとで、例えば「哲学は神学の直接の後継者である」と述べて初期の哲学と宗教との親和性を主張する Cornford などの解釈と明らかに対立するものである。

(3) しかしながら、このような単純な二者択一的問い方で初期の哲学の特性や宗教・神話との関係性を理解しようすることは、哲学の重要な側面をことさらに切り捨てることになる。実際、プラトンなどの古典期哲学の「合理的」思索の中でも、依然として「神話的」要素が重要な役割を果たしていることは言を俟たないのである。ギリシア宗教が世界に関する合理的思索と両立しえないというのは「ひとに偏見をいだかせる想定」である。しかし他方、哲学と伝統的宗教や神話的思考とを連続一体的に捉えることも、両者の異質に思われる要素を結びつけていく作業のなかで必要以上に哲学が神秘化される事態を招来しかねない。ソクラテス以前哲学者の著作断片で「神」ということばほど頻繁に現れることばもないと指摘されるとおり、ミレトス派の自然哲学においてもあたりまえのように「神(々)」が主題化されている。それゆえ、ソクラテス以前哲学者による自然現象の説明は神々の排除にほかならない、といった認定はともそのままでは受け容れられない。彼らの「神(々)」という語を非宗教的・自然的用法と見なしてしまうと、そこに含意されている宗教的要素が説明されないままとなる。

(4) 前6世紀のタレスは、何であれ運動を惹き起こす力をもったものには生命つまり魂があるという概念的真理を前提に、万物——文字通り生命をもった有機的生物に限定されず、琥珀や磁石といった一見無生物に思えるものも含みうる——において見いだされるダイナミズムに言及している。どれほど多様に見えても種々の運動や変化を惹き起こす原因とはただひとつであり、それを生命原理としての「魂」という概念で説明する。これは経験主義のパラダイムであると評価されることもある。しかしながら、「魂」による説明(DK11A22)は単なる比喩にとどまるものではない。生命あるいは生氣それ自体が世界を構成する諸事物に浸透していて、その広範性と永続性をタレスはまさに「神的」と呼ぶに値するものと考えている。そして、そのような特性を備えた生命ないし生氣は、タレスによって擬人的ではない神的存在と見なされている。ここにおいて Henrichs が言うように伝統的な擬人神も含む多神論の強調的主張を見て取ることはできないように思われる。

(5) 人間が自らを神々と根本的に異なる存在であると自覚することは、古代心性の表出であるが、では古代ギリシアの神々が人間から峻別される場合の基本的な神的特質とは何か。Henrichs によれば、それは不死性と神人同形性と権能である。このうち不死性は権能の根拠であり、このふたつはそれらが失われれば神が神として存立しえないようなそういう密接な関係にある特質であるのに対して、神人同形性は、他の特質にとって必要な前提条件ではない。この特質は、むしろ人間との関係の確立のために必要なものであり、つまり、神人同形性のゆえに神々は死すべき人間に対して顕現し、神は人間に見られ経験されうるのである。タレスが神人同形性を排除したうえで、「万物は神々に満ちている」と語る時、なるほど伝統的宗教の特質は排除され、また自然探究も人間の側の能動的な関与が求められることとなるが、それでも依然として魂としての神々は非宗教化という事態をこうむっているわけではない。

(6) タレスの弟子とされるアナクシマン드로スにとって万有の始源である「無限なるもの」は神的なものであり、これが万物を取り囲み、舵を取って導いていて、不死不滅であるとされている。ヒッポリュトス(DK12 A11)は、「不死にして不滅である」という表現に代えて「永遠にして不老である」という表現を伝えている。そもそも「不死にして不老」というのは叙事詩において神々の属性を表す定型句である。この文言がアナクシマン드로スの用いたものであるとして、それでは、「無限なるもの」がここで神的なものと言われているのは、伝統的な神々がもっている属性を、同じ神としてそれが有しているからか。そうではない。中性名詞の「無限なるもの」はもはや伝統的な神の一人ではない。万物を包摂して統御するという「無限なるもの」が有している力、機能のあり方こそが神的なのである。ここで示唆されるのは、「無限なるもの」が、知性的企図をもって諸世界を継起的に形成し、その全プロセスを収斂しているということである。ここに、物質主義的でなくむしろ目的論的な自然観を認めることができよう。

(7) Gregory は、アナクシマン드로スが叙事詩人をターゲットとして神々の非自然的な介入という彼らの現象説明を拒絶し、その場限りの説明でなく一貫した基本的原理による説明を行っているとする。しかし、その前提となっている「宗教的存在=非自然的存在」そして「擬人神による現象説明=非自然的説明」つまりは「宗教を排除した現象説明=自然的説明」といった等式は妥当ではない。もしもアナクシマン드로スが自然の説明から徹底して宗教的要素を排除しようとしているのであれば、あのような定型句を用いた理由がわからない。アナクシマン드로スにおける「無限なるもの」は、宗教的でありながら自然的であるものの存在の余地を残しているように思われる。そしてそれは、必ずしも合理的思惟における神話的思考の「残滓」ではない。「無限なるもの」は諸存在にとって存在の位相が異なるという点で外在的なものと言えなくはないが、それは、相反的諸存在からなる現実世界の外部にそれらと切り離された形で「無限なるもの」が併存しているということではない。諸存在の現実形成のための基点(「生みだすもの」)を分離する無規定的な始源・母体として、「無限なるもの」が因果的かつ論理的にそれ

ら現実諸存在を制約しているという意味で、むしろ両者は言わば「潜勢態」と「現勢態」のような関係にあると見ることができよう。このとき始源は単純に「超自然的」とは呼べなくなる。

(8) クセノパネス（前 570 頃~前 470 頃）とヘラクレイトス（*fl.* 前 500 頃）は、「神」の本性を規定するとともに伝統的宗教に対する批判的態度を明確に表明した。クセノパネスは、一般に広く受容されてきた神話の世界に疑問を呈し、道徳的墮落を神々に帰している叙事詩人を批判し、神人同形論のナンセンスな含意を揶揄する。Boys-Stones はこの批判が、宗教一般ではなくあくまでも詩人個人に対するものであり、また、言わば文化相対主義についてのニュートラルな言及だと解する。しかし、彼の「断片」14 での言葉遣い（「人間たちは…思いなしている」）から、神々についての人間たちの理解は彼によってすでに臆断と見なされているのは明らかである。彼は人間の知のありようを「思わく」と呼び、これを絶対確実な真理と区別していたことを想起すべきである。この批判は神人同形論に対する根本的批判なのである。神に神人同形性を認めないということは、従来のように顕現によって神が見られ経験されることはもはやないということの意味する。むしろ、ここで否定されているのが、あくまでも神人同形性であり、不死性と権能とを有する神の存在そのものではないことは、明らかである。

(9) クセノパネスの宗教批判の背景にあるのはきわめて特徴的な「神」概念である（「断片」23~26）。神々と人間のうちで最大の権能を有しており、ただしその心身のありようは人間に似ておらず、総観的視点をもって思惟の力によりすべてに運動を与え秩序づける一なる神。それは、道徳的卓越性を備えた知性的存在である。この神論が、経験的事実に基づくア・ポステリオリな論証ではなく、「それ以上の権能をもったものはいない」という神に関する概念的真理を前提としたア・プリオリな論証の結果得られたものであることは言うまでもない。これだけの証言では、一なる神をどのようなものとして表象すべきか、明確なところはわからないが、人間的な身体をもたず、完全な認識を通じて真理を把握するからには、それは、あたかも万有を身体として、そこに運動と生命の原理として内在する力能のようなものかもしれない。

(10) これは一神論の宣言であるかのように思われるかもしれない。しかし、そのように解釈するためには、クセノパネス自身のことばに登場する複数形の「神々」をその体系内で矛盾なく説明しなければならない。それが困難であると思われるとき、クセノパネスの神論は一神論（monotheism）ではなく単一神論（henotheism）と解されることとなる。単一神論とはつまり、神々のヒエラルキーのなかで全権を有する至高神が君臨しており、他の神々は重要性や権能の点で下位に位置するとみる立場である。だが、クセノパネスの「一なる神」はその存在の様態や認識能力の点で複数形の「神々」とは明らかにその存在の位相を異にしている。複数形の「神々」は、クセノパネスが自らの詩を通じて語りかける当の聴衆の宗教観に合致する限りでの「神々」であり、彼にとって真の意味での神と関わりはなく、万有を構成する諸部分のひとつなのである。その限りでは「神々」は自然化されていると言ってもよいだろう。「一なる神」は、そうした「神々」も含んだ万有の運動や変化を全体として知性的に統括している。かくしてクセノパネスは、ソクラテス以前の哲学において例がないほどに一神論に接近している。

(11) ヘラクレイトスもまた、伝統的な宗教儀式を批判しているが、その批判のポイントが、宗教そのものの否定にあるのではなく、かと言って伝統的宗教の枠組み内での教理上の批判にあるのでもないという点に留意する必要がある。万有における神性を理解していないままに伝統的な神像に祈りをささげるのは、結局は単なる容れ物に過ぎない家に語りかけることと変わらない。「断片」14b は、不敬度なやり方による秘儀伝授のみを否定しているという解釈が可能で、カークはこの解釈を採り、もし正しく執り行われたなら、密儀も価値あるものとなりうるというヘラクレイトスの密儀に対する一定の評価を読み取ろうとしている。しかし、彼をそのような「宗教改革者」と見ることは困難である。彼は、「神（々）」そしてそれに類する語を 10 回以上用いており、オリュンポスの伝統的な神々の名前についても 10 回近く挙げているが、なかでも注目すべきは、彼自身の自然学的見解を語る際に言及されているものである。もちろんこれは、自然の諸事物を神格化した多神論の表明ではない。万有は対立相反関係にある事物によって構成され、それら相反する諸事物は、時間の経過のなかで相互に拮抗・抗争しながら動的な均衡と調和を達成する、いわゆる「反対者の一致」というあり方をとる。そして、世界のこの規則的な変化過程を支配する原理が単数形の「神」なのである。「神」は中性名詞の「知あるもの」としての二者と言い換えられており、擬人神ではない。その権能と永続性に着目した場合、それは万有の「生」の原理、存在の原理であり「万物を通して万物を操る叡智」である（「断片」41）。ヘラクレイトスはその原理を「ロゴス（理）」と呼んでいる。神的ロゴスは「共通なるもの」（cf. 「断片」2）であるがゆえに、彼の神論はその点で一神論的な傾向をもっているとも言える。ただし、その神はあくまでも世界内部でその自律性を実現しているのである。

(12) ソクラテス以前の哲学者において、たしかに神（々）は自然の外部から内部へと移行するとともに、「非自然的」なものから「自然的なもの」へと変わっているかに見える。Algra は、ミレトス派の描く世界像は十分に世俗化されていたわけではないにしても、ヘシオドスにおいて神人同形的に捉えられていた神々に代わって、その世界像においては、より非人格化さ

れた、つまり自然化された神の観念が示されており、しかもその観念は完全に有神論的なことばでの記述を容易には許さないものであると述べている。しかし、少なくとも彼らにおいて、いわゆる脱神話化や脱神論化によって、哲学的神論が、神（々）を、人格者から抽象的原理へと還元していると言明できるか。彼らの自然学説の抽象的原理は、「包括する」「操る」「知あるもの」「心の思い」といった表現に見られるように、依然として人格的要素を内包した能動的な作用者であり、還元は未だ達成されてはいないと言わざるをえない。だから、「自然を理解することが自然学者たちの第一の狙いであって宗教を改革することではない」という断定は妥当とは言えない。なぜなら、彼らにとって自然の理解は同時に伝統的宗教への批判であったが、それは宗教そのもの、神に対する信仰自体を否定することではなかったからである。その意味では、誤解を恐れずに言えば、自然哲学と宗教の改革は一体化していたのである。

(13) 一般には自然哲学者における神（々）は「崇拜」の対象となっていなかった。しかし、体系化された宗教的儀式が「崇拜」に伴われていたとすると、むしろ、クセノパネスにおいてもヘラクレイトスにおいてもそのような伝統的慣習を通じた神との関係の確立こそ否定されなくてはならないものであった。最初に述べたように尊崇や畏怖、賞賛といった宗教感情は必ずしも神話や儀式をとまなうわけではない。むしろ、神人同形論を否定して世俗的な儀式や神話を神から排除することで、より純粋な形での宗教の端緒を見いだすこともできよう。Martin は宗教を、五つの基本的な宗教的問いに答えようとする試みという観点から規定することを提案している Monroe Beardsley & Elizabeth Beardsley の見解を汎用性のあるものと見なしている。その問いとは次のようなものである。1) 人間の基本的な諸特徴と人間が直面する主要な諸問題とは何か？ 2) 人間の生にとってこの上ない重要性をもった「人間ならざるもの」はいかなる諸特徴を有しているか？ 3) 人間本性と宇宙万有を踏まえたとき、人はいかに生きるように努めるべきか？ 4) 以上 3 つの問いに対する答えが与えられた場合、人間と人間ならざるものの本性についての理解と人間の生の理想への専心とを人においてもっともよく発展させ維持させる実践とはいかなるものか？ 5) 以上 4 つの問いに対する真の答えを探究するにあたり、どのような（諸）方法を用いるべきか？ かくして、密接に関係したこれらの問いのすべてに解答を与える、相互に関連した諸信念のまとまりが宗教と定義される。

(14) この規定に照らしてみたととき、自然哲学者たちを無神論者と呼ぶことはできない。自然哲学者による自然研究は、たしかに「神々」を排除したかもしれないが、「人間ならざるもの」としての「神」を排除してはいない。それは、実は「超自然的」なものではなく、「非自然的」なものでもなく、むしろ「自然内的」なものとして、現に自然の説明原理となっているのである。われわれは神の探究すなわち神論の端緒を、ヘシオドスの『神統記』に、とりわけその系譜の起点に中性名詞「カオス」を措定して「まず初めにカオス（空隙）が生まれた」（116行）と謳ったところに求めることもできよう。神々の始原であるカオスについて、それが男性性をも女性性をも超えた単一の礎質という本性を有しているという見解をそこに看取することができるからである。そして初期の自然哲学者たちにおいては、自然の内部にあって内側から世界を規制する法則・自律的原理として神として構想されることになる。たしかにその神は神人同形性という特質をもたないものではあるが、不死性と偉大なる権能を所有しているものとして、宗教感情の向かう対象となりうる。そして、こうした「哲学者の神」は自然研究がさらに深化した後においても保持されていく（例えば紀元前 5 世紀のアポロニアのディオゲネス）。それは、背後にある、自然哲学者が共有している宗教的心性の強固さを物語っている。

(15) そして、そのような心性を踏まえたとき、ソフィストのクリティアスのように宗教を装置だと主張する「合理的」宗教観を無神論に直結するものと見なすことには慎重であるべきだろう。エウヘメロスの無神論がその影響を受けているとされるプロディオコスについても同様である。彼の無神論的な宗教起源説ではいわゆる二段階説が採られており、つまり、原始の人々が天体や山河を初めとする自然界の諸物をまさにその有益性のゆえに神格化する段階と、ひとを養い育てる有益なものを発明・発見した人々を神と見なす段階である。セクストスはエウヘメロスの「神論」について後者の段階に相当すると強調する。その場合、神々とは単に人間にすぎないとしてその神性を拒絶する無神論ということになる。要するに神々は人間の案出したものにすぎないとする見解である。しかし、エウヘメロスの「神論」において天空の神々等の存在が言及されるとき、その神論が神的存在の完全な否定ではなく、むしろ自然内的な神性の許容とも解されるのである。そこに先の宗教的心性の存続を認めることもできよう。資料上の制約があるが、この二面性を整合的に説明することが彼の「無神論」の理解の核心となる。少なくとも、エウヘメロスとただちに無条件的無神論者と解することは困難である。

<引用文献>

- ① Algra, K., "The Beginnings of Cosmology", in Long A. A. (ed.), *The Cambridge Companion to Early Greek Philosophy*, Cambridge, 1999.
- ② Boys-Stones, G., "Ancient Philosophy of Religion: An Introduction" in Oppy, G. & Trokakis, N. N. (eds.), *Ancient Philosophy of Religion (The History of Western Philosophy of Religion, Vol.1)*, London/New York, 2014.

- ③ Cornford, F.M., *From Religion to Philosophy. A Study in the Origins of Western Speculation*, Cambridge, 1912.
- ④ Diels, H. und Kranz, W. (Hrsg.), *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 3Bde, Berlin, 1951-52⁶. [DK]
- ⑤ Gregory, A., *The Presocratics and the Supernatural. Magic, Philosophy and Science in Early Greece*, London/ New York, 2013.
- ⑥ Henrichs, A., “What is a Greek God?”, in Bremmer, J. N. & Erskine, A. (eds.), *The Gods of Ancient Greece. Identities and Transformations*, Edinburgh, 2016.
- ⑦ Martin, M., “Atheism and Religion”, in Martin, M. (ed.), *The Cambridge Companion to Atheism*, Cambridge, 2007.
- ⑧ Roubekas, N.P., *An Ancient Theory of Religion*, New York/London, 2017.
- ⑨ Rovelli, C., *The First Scientist. Anaximander and His Legacy*, Eng.tr. Yardley, 2011.
- ⑩ Vernant, J.-P., *Les origines de la pensée grecque*, 3^e éd. «Quadrige» (1^{re} éd. 1962), Paris, 1988.
- ⑪ 内山勝利編, 『ソクラテス以前哲学者断片集』I (内山勝利, 國方栄二, 藤澤令夫, 丸橋裕, 三浦要, 山口義久訳), 岩波書店, 1996年.
- ⑫ G・S・カーク, J・E・レイヴン, M・スコフィールド, 『ソクラテス以前の哲学者たち』(内山勝利, 木原志乃, 國方栄二, 三浦要, 丸橋裕訳), 京都大学学術出版会, 2006年.
- ⑬ G・ミノワ, 『無神論の歴史』(石川光一訳), 法政大学出版局, 2014年.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① Kaname MIURA, “Note sur la «δύναμις» comme «ἄρχος» des êtres en le *Sophiste* 246A-248A”, 『哲学・人間学論叢』(査読無), 第10号, 2019年, pp.57-67.
- ② 三浦要, 「対称性に訴える論証」と死の無害性について, 『哲学・人間学論叢』(査読無), 第9号, 2018年, pp.41-52.
- ③ 三浦要 (書評), 「Anaximander : A Re-Assessment by A.Gregory; Apeiron : Anaximander on Generation and Destruction by R.Kocandrlie and D.L.Coupric», 『西洋古典学研究』(査読有相当 [学会依頼]), 第66号, 2018年, pp.122-126.
- ④ 三浦要, 「無神論と有神論のはざままで——ソクラテス以前哲学における「神論」の特質をめぐって——», 『哲学・人間学論叢』(査読無), 第8号, 2017年, pp.63-79.
- ⑤ Kaname MIURA, “Sur l’identification des «Amis des Formes» en 245E-249C du *Sophiste* de Platon”, 『哲学・人間学論叢』(査読無), 第7号, 2016年, pp.65-76.

〔図書〕(計2件)

- ① 三浦要, 中村 健, 和田利博 (翻訳), 京都大学学術出版会, プルタルコス著『モラリア 12』(担当部分: 『月面に見える顔について』, 『冷の原理について』, 『水と火ではどちらが有益か』), 2018年, 担当ページ pp.1-157 (総ページ数 370) .
- ② 三浦要, 小関周二, 後藤道夫ほか 195名 (項目執筆), 知泉書館, 『哲学中辞典』, 2016年, 担当部分: 初期ギリシア哲学関連 22項目, 担当ページ pp.21-22, 44-45, 291-292 ほか 計 32 ページ (総ページ数 1390) .

〔その他〕(計1件)

- ① 三浦要, (解説) 「プルタルコス『月面に見える顔について』, 『冷の原理について』, 『水と火ではどちらが有益か』について」(査読無), 京都大学学術出版会『モラリア 12』(プルタルコス著) 所収, 2018年, pp.312-339.

6. 研究組織

- (1) 研究分担者
該当なし
- (2) 研究協力者
該当なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。